

御遠忌奉仕の爲に登山せられし際十年振りにて君の講座上の姿を見説教を聽聞し圓熟せる態度に感歎是を久しゅうしたりき、其の折も心臓症を發し學寮の予が隣室に横臥しつゝ昔を語り現在將來の事など語り合へる、惟へば君との最後の會合なりき。

折ふし今夏予は眼疾に陥居し北海の知己よりの通知を家人に讀ましてめて咫尺の辨せざる予が兩眼涙拭きもあへざりき。北海に藤田死し、孤城を守る予亦盲目たらんにはと思へば、泣かさざんとして能はざりしなり。

君先きに帶廣に化境を定め是よりの活動こそ力あるものなるべかりしに、遠く離れて沼上學師範の落膽を思ひ冷き骸に泣き臥す令閨と令息の様を思ひ浮べては胸迫らざるを得ず火には入り水にも潜りて行きて慰めんと思へども自ら醫藥に親しみつゝある身のため何んともする能はず終りぬ。

今や健康回復して再び學窓に還れり一人の君を失へる予は予の畢世の努力を以て百の藤田千の藤田を世に送り出すべしと心中に秘めたる君の名の前に否予が喚に呼びかけつゝ努力を續けつゝあり。あはれ境雲院日暉聖人予が努力を護らせ給はん事を

(昭和九年十一月十七日)

盆ご行事

田川 惠良

盂蘭盆 (ulambana) とは翻譯名義集に、此翻倒懸一盆是此方貯食之器、三藏云盆雜百味以貢三尊仰大衆之恩光、救倒懸之窘急、義當救倒懸器、又應法師云正云烏藍婆拏と要するに苦を救ひ樂を興へるの要法の謂である。昔日連尊者が、その母を救つたと云ふ古事から出たもので、盂蘭盆が純粹に佛教から生じて來た儀式であり、風習となつた以上、その佛教が隆盛を極める日本に於いては又當然その行事も第一位に在る、單に盆と聞いても何等疑念を起さぬ程私達日本人には知悉され言語となつて生活の中に溶け込んで居るが、遡つて文件を見ると「日本皇紀」には齊明天皇三年七月始めて盂蘭盆會を設け、同五年勅して諸國に講ぜしむとあり又「釋氏要覽」には盂蘭盆會はこれ釋氏の孝を述べ恩を報ひ、苦を救ふの要とある、つまり、千二百年前頃から日本のものになりかけ、佛教思想と共に發展し在來の風習に織りこまれて現在に及んだのである。

盂蘭盆經には大目犍連始得六通、見其亡母、生餓鬼中、目連悲哀即以盂盛飯往餉其母、食未入口化成火炭、遂

不得食目連大叫悲號涕泣馳還白佛具陳如此佛言汝母罪根深結非汝一人力所奈何：當須十方衆僧感神之力：七月十五日とそれから目連は、佛の仰せの如く、七世父母：厄難中者具飯百味：牀敷臥具盡世甘味以著盆中供養十方大德衆僧：と遂に母は、即於是日得脫一劫餓鬼之苦に至つた、次に、萬人庶民行慈孝者：七月五日佛觀喜日：願使：七世父母離餓鬼苦：憶生父母爲作盂蘭盆施佛及僧以報父母長養慈愛之恩云と、あるより後代人が之に因つて廣く華飾し盂蘭盆會を行うに至つたと『歲時記』等に書いてある

佛教が宮庭や上流社會の人の手から次第に一般人の間に浸み込むと魂祭りの風習となり。徳川時代には、十一日の準備、十二日から十三日にかけて草市てふ盆燈籠や提灯等の臨時市場が開催され、十三日の夕刻には麻鼓を焚いてお迎ひ火、十四、十五兩日祭つた後、十六日に送り火を行ひ、寺では施餓鬼を修する等大体の形は定つて居た。地方に依つては少しの異例はあるが大体は以上の形を持して居る。

この盆の行事が、在來の風習と結びつき納涼そして踊りと大衆へ、娯樂へと變化して來た。川施餓鬼、御魂送り、燈籠流し、それが花火やら遊船やらを呼んで何か別な感じさへする夏の夜の情景と化して仕舞つた。

更に踊りとなると愈々本來の持つ意義から遠ざかる氣

がする、然し以前は燈籠踊り等と云ふ幾分盆の香が残るものがあつたが、今は殆ど民衆娯樂と化し名残りは唯十五夜の月にのみ止まり、音頭と衣粧の交錯を淡い月光に圓陣から見出すに過ぎない、と云ふより性の解放、青年男女の社交場か交際時と化し、日本古代からあつた何物かに結びついた風俗の名残りであつて盆に關するものは唯その時機を同うするにすぎない、と云へばそれ迄だが、月夜―泣けない哀調と靜寂に酔はんとし身分をも一本の手拭ひにかくして月の入る迄踊り狂ひ所謂若いセンチを年一度その歌と踊りの中に味はんとする心、―嚴禁されたこともあつたが―それが今迄盆踊りを持續して來ただ。

而してそれは暇ない農民達にどれだけの慰安を與へて來たことか、農繁の小暇、短い夏の夜、祖先を思ひ、心を和らぐ、そうしたなら踊りに冠する盆の字も無意義ではなからう。

正しい意味の盆を知り、それに附隨したやさしくも美しい行事はいつ迄も續けて行きたいと思ふ。

